空間・社会・地理思想 27 号，239-242 頁，2024 年
Space, Society and Geographical Thought

香港で開催された EARCAG
――回想録――

ウォン　キッピン（タミー）（王　潔萍）*・水岡　不二雄 **
リー　チーラップ　ジャッキー（李　子立）***
ソロモン　ベンジャミン ****

編集注

鄧永成教授は、2001年と2016年の2回、香港でEARCAG会議を開催した。2001年の第2回EARCAG会議のテーマは「Alternative Geographies of Asia in the New Millennium」であり、2016年の第8回EARCAG会議のテーマは「Radicalism in Theory and Practice」であった。本稿では、この2つの会議の準備と開催において教授と密接に協力した人々によって書かれた3つの回想録をまとめた。彼らの経験と記憶を振り返ることで、教授が当時の香港と東アジアが直面していた社会空間的な課題に対応して、これらの会議をどのように組織したかを示す集合的な回想録を提供する。

回想 1

香港での EARCAG 第 2 回会議

水岡　不二雄

韓国の慶州で開催された第1回会議の後、新生EARCAGの使命は、東アジアにおける批判的地理学の主要なプラットフォームとして出発させることであった。EARCAGの創設者の一人として、水岡は香港大学の教員に連絡を取ったが、彼の反応は芳しくなかった。そこで水岡は、第2回EARCAG会議を主催してもらえないかとウィンシンの門を叩いた。

ウィンシンはEARCAGの開催に強い意欲を示し、学部長もこの計画に非常に共感し、自ら主催者を志願した。国際批判地理学グループ（ICGG）は、この会議に財政的支援を惜しまなかった。こうして第2回EARCAG会議は、国際的な背景を持つ、より公式な、学部全体のイベントとして実現した。会議は2001年12月6日から9日まで（会議前後のフィールド・トリップを含む）、香港バプテスト大学（HKBU）で開催された。

基調講演には、雑誌 *Antipode* の創刊者であるリチャード・ピートを招聘することをウィンシンが提案した。ピートはクラーク大学で水岡の博士課程の指導教員であったため、水岡はピートに香港に来ることを連絡した。ピートは快諾したが、ピートのアメリカ東海岸と香港間の旅費を負担するはずだったHKBUの地理学部は、ピートが大幅な迂回を伴う高額な航空運賃を要求したため困惑した。

水岡は基調講演のひとつも行った。「失敗した国々」へのアメリカの軍事介入を扱い、新国際分業（NIDL）の空間的拡大における限界という観点から分析した。会議前のフィールド・トリップは珠江デルタ（PRD）で行われ、輸出志向の労働集約型製造業に従事する製造工場を訪問した。当時、PRDはNIDLの中核として機能して繁栄していた。

開会演説と招待論文を含む57の論文が発表され、98名の参加者を集めた第2回会議は大成功を収め、EARCAGのさらなる発展の足がかりとなった。

第2回会議終了後、ウィンシンは水岡に、そこで発表された優れた論文を共同で一冊の本に編集することを提案した。水岡は、東京の地理学の専門出版社である古今書院に連絡を取り、編集者を説得し、水岡が所属する一橋大学を通じて申請した日本学術振興会（JSPS）から200万円の資金援助を受けて、編集した本を出版することにした。ウィンシンと水岡は共同で序文を執筆した。ウィンシンは、1997年に香港をイギリスに返還することで、中国がついにその植民地の過去を脱したと主張した。水岡は、チベット人とウイグル人が中国の支配の下で依然として圧迫されているという別の見解を表明した。ウィンシンはこの見解に納得しなかったが、最終的にはそれを不本意ながら受け入れた。240ページの書籍 *East Asia: A Critical Perspective* は2010年に出版された。

水岡はウィンシンと協力して、第2回会議を実現した。これにより、EARCAGは東アジアの批判的地理学者の間での目立つ地位に成長した。

*　香港批判地理グループ・大阪公立大学都市科学・防災研究センター客員研究員
**　一橋大学名誉教授
***　香港批判地理グループ
****　IIT マドラス教授

回想２

ブレークスルー：香港批判地理学の転換点

ウォン　キッピン（タミー）（王　潔萍）

私の学術的な旅は、ウィンシンの修士（MPhil）課程の学生として、2001年に香港バプテスト大学（HKBU）で初めて開催された第2回EARCAG会議から始まった。この会議は、水岡不二雄氏の多大な協力を得て、ウィンシン・タンが主催した。私は彼と共同発表者であり、後に出版される会議の書籍のための原稿準備も手伝った。この画期的なイベントは、そのイベントに向けての、そしてそれ以降のウィンシンの貢献、つまり香港の知的アリーナにおける批判地理学の発展に対する彼の献身を浮き彫りにするものである。それまでは、香港の地理学の教育と研究は、実証主義と計量的方法論に支配されていた。それに対して、ウィンシンは、学部生にとって非常に難しいが重要な科目である批判地理学の考え方や概念について教えてくれた唯一の地理学の教授であった。その中には、都市空間や開発の根底にある様々なプロセスや力関係も含まれていたが、マヌ・ゴスワミの植民地史に関するテキストを活用することで、アジアを理論化する際の西洋中心主義に対する彼の批判を紹介してくれた。

この会議は、地元の学術界にとって転換点となった。香港における批判地理学と研究ネットワークの先駆けとなっただけでなく、中国を含むより広い東アジアの文脈におけるオルタナティブな理論展開と批判的研究が探求されたのである。その後数年にわたり、ウィンシンは、グローバル資本主義によって形成されただけでなく、イギリスの植民地主義や中国との関係にも根ざした香港の歴史的地理を問い直すことで、オルタナティブな理論展開に本格的に取り組むようになった。この会議とその後の会議で、ウィンシンは海外や中国から他の批判地理学者や研究者を紹介し、地理学者仲間や学生たちがより広い知的コミュニティと関わるよう促した。こうした出会いが、さらなる共同研究、交流、そして深い友情を育んだ。例えば、水内俊雄氏とは日本-香港ワークショップを数回開催した。2001年からは、彼らが始めた定期的なフィールドワークによって、香港にURPのサブセンターが設立された。このような共同研究は、都市計画や都市空間における力関係だけでなく、ホームレスや都市貧困層、NGO、住宅、社会福祉政策などの社会空間や実践についても、ウィンシンの研究視野を広げ、深めていった。

第2回EARCAGの直後、ウィンシンは学生たちと研究グループを結成し、空間、権力、社会的(不)公正問題などの批判的理論を探求した。これが最終的に香港批判地理学グループ（HKCGG）の共同設立につながった。HKCGGとは、批判的理論を読み、議論し、フィールドワークを行い、コミュニティ・プロジェクトやその他の社会的関与を行う、ウィンシンと彼の学生たちのための、緩やかだが自主的に組織された集団的な知的空間である。

第一に、理論的な言葉と実践的な言葉、そして地元のコミュニティや活動家とコミュニケーションをとるための知識や言葉が不足していたのだ（不安でいっぱいだったが、わくわくするものだった！)。第二に、HKCGGは香港の大学では前例のない地理学であった。第三に、2000年代半ばまでさかのぼるが、「空間」という用語は、一般市民やコミュニティーの議論には無名のままであったし、社会運動（香港ではまだ伝統的なソーシャルワークの規律に基づいていた)の情報提供にも使われていなかった。

HKCGGは地理学（特に香港）において非常に疎外された立場にあったが(そして今も)、ウィンシンの粘り強い努力のおかげで、HKCGGには様々な学生が集まり、「空間」という用語は公的な議論や社会運動において重要な視点のひとつとなった。その結果、この学生グループは香港におけるより大きな知的・社会的ネットワークの一部となり、さまざまな分野やコミュニティの人々と出会い、「帖街(ウェディング・カード・ストリート)」（利東街)の取り壊しや、スターフェリー／クイーンズ・ピアの取り壊しに対する占拠運動など、当時の都市闘争を特徴づける重要な出来事に立ち会う活動にも関わった。

これらはすべて、ウィンシンの学術的生活の非情に具体的な道筋へとなった。それは社会的実践を通して批判的理論を問い直すことである。この10年の終わりまでに、これらのアイデアは南アジアからの研究者、そして後には修士課程の院生を含む会議やワークショップに根付いた。これは「ジェントリフィケーション」や「新自由主義」など一般的に十分に批判的に取り組まれていない、一般的で当たり前と思われている、しばしば押しつけられた概念を批判するために、そしてまた、空間物語というアイデアを通して、どこか別の場所の批判地理学で議論されるべき、より広範な教育法を生み出すために、ともに歩むべき道筋、協働であった。このようにウィンシンは2015年以降、文脈と位置付けられた歴史を真剣

に考えることで、香港やおそらく東アジアを超えた概念的空間を開拓したのだった。

回想３

幸福な連続性：政治的な動乱の中での楽しい瞬間

ウォン　キッピン（タミー）（王　潔萍）、
リー　チーラップ　ジャッキー（李　子立）、
ソロモン　ベンジャミン
（ホイ　ツーワーの回想と寄稿を含む）

第2回EARCAGから15年後の2016年、ウィンシンは再び香港で第8回EARCAG会議を開催した。しかし、香港の政治的背景は大きく変わっていた。10年前、一連の都市紛争と社会運動が香港全土で同時に勃発した。さまざまな問題に拡大し、長期化した紛争は市民社会を疲弊させた。しかし、紛争はさらにエスカレートし、国家や政府権力の暴力的で凶暴な対応に直面する大規模な社会動員へと発展した。香港は、東アジア、そして世界中で紛争と活動の波が押し寄せている主要な場所のひとつである。

ウィンシンは、香港の「雨傘運動」からわずか2年後、政治的・学術的緊急性をもってこの会議を企画した。彼は、最近の社会運動と都市紛争の分析を進め、東アジア、特に香港における批判地理学のための代替理論を開発することを望んだ。第8回EARCAGのテーマ「理論と実践におけるラディカリズム」は、この危機の瞬間を反映したものであった。東アジアにおけるこれらの活動主義や社会運動の理論と実践を理解する」という目的のもと、さまざまな分野、視点、地域、国から100人を超える参加者が集まり、社会活動主義に関するさまざまなトピックが発表された。

第8回EARCAGは、非常に実り多い洞察に満ちたものとなり、ウィンシンの生涯をかけた知識と実践の弁証法の追求を象徴するものとなった。アンリ・ルフェーヴルに触発されたこの弁証法は、実践に情報を与え、形成し、同時に実践によって挑戦され、再形成される理論に関連している。ウィン・シンは、社会と世界を異なる方法で理解する上で、「空間」というキーワードがいかに重要であるかをしばしば教えてくれた。この会議は、政治的な出会いの重要な瞬間と見ることができる――ウィンシンは異なる学科の人々を集め、最近の都市紛争や社会運動に関する新しい分析と解釈を促進し、既存の理論に挑戦し、東アジアを理解するための代替理論を探した。

香港と中国で代替理論を開発することに完全に取り組んでいる彼は水内俊雄に次のように記している。

> 英語圏で教育を受けた人間にとって、西洋の批判的地理学と都市研究に没頭することは、それに対して非常に批判的であるにもかかわらず、東アジアは以前はあまり具体的な地理的概念ではありませんでした。

ウィンシンは知識生産の覇権主義や、東アジアを西洋の理論に対する漠然とした経験的なものとして扱うことに強く反対した。西洋の理論を無批判に適用することは、特定の場所や時代における社会的、経済的、政治的、文化的な特別な軌跡を取り去ったり、文脈から切り離したりするものであり、「問題のある」であると考えたのである。ウィンシンの造語である「ランダムな概念的帰属と横取り」の問題は、現代の学術業界においてより深刻なものとなった。学術は開かれていないどころか、「ソーセージ工場」のようになり、資金調達と地位を巡る戦いになり、より分裂し、官僚的で反動的な形態に変化している。この会議で彼は、東アジアは「多様な資本主義」のもう一つの形態として、資本の論理に従うだけだという見方を拒否した。この解釈は、「後発国がより先進的な相手に模倣される」という直線的な視点を助長するものだと警告した。

最後に、ウィンシンは、オルタナティブな想像力を探求するために、特定の歴史的・地理的過程に根ざしたさまざまな実践から理論的洞察を引き出した。地元のNGO、活動家、元学生、社会運動家と協力し、ウィンシンは第8回EARCAGのために5つのフィールドトリップを企画し、雨傘運動、都市貧困層のための住宅、都市再生、新界開発の政治、旧工業用地の変容など、論争の的となったトピックを再検討した。これらの論争の的となった分野は、過去20年間におけるウィンシンの学術活動とコミュニティ・ネットワークの礎となった。コミュニティ・グループや個人と直接関わる場として、現地視察は、社会正義は単に上から適用されたり、他所の概念から導き出されたりするものではなく、むしろ現実と可能性を密接に理解することから生まれるという点を強調した。これらの訪問は、批判的都市地理学に対する彼の協力的なネットワーク・アプローチを実証するものであり、そこでは学者、学生、コミュニティが集団的に批判的思考、相互理解、オルタナティブな洞察に貢献した。こうした実体験は、「地元」だけでなく、国を超えたより大きな文脈を育んだ。ナ

ショナリズムに縛られることなく、このような批判的対話は、現代の香港の政治的景観を他の場所と結びつけた。例えば、バンガロールのソリー・ベンジャミン、ムンバイのルパリ・グプテとプラサド・シェッティは、その現前が、日常の領土的実践の政治的、政治的帰結に至るまで、コンテクストの微細な点を強調したと述べている。これらすべてが、知的、社会的、コミュニティ的な空間をより広範に織り交ぜようとするウィンシンの献身を浮き彫りにした。

批判的理論に専心する都市地理学者として、ウィンシンは学術研究と地域社会をつなぐ生きたネットワークを構築してきた。彼が書いているように、「世界は相互につながった多くの部分から成り立っている」。従って、東アジアにおける活動や社会運動は、東アジアに根ざし、世界の他の地域と相互に関連しながら発生することになる」。おそらくこれは彼のユートピア的思考であり、オルタナティブな想像力と公正な社会のために共に努力することなのだろう。私たちが考えているように、それはまだ実現されていない目標である。大きな喪失にもかかわらず、相互のつながりを信じる彼の信念と、批判的な視点を育むことへの献身は、何世代にもわたって実を結び続けるインスピレーションの種をまいたのである。

香港で開催された第 2 回 EARCAG 会議参加者集合写真
2001 年 12 月
（第 2 回 EARCAG 会議主催者提供）

空間・社会・地理思想 27 号，243-246 頁，2024 年
Space, Society and Geographical Thought

EARCAG in Hong Kong:

A Collective Memoir

Kit Ping (Tammy) WONG*, Fujio MIZUOKA,**
Chi Lap Jacky LEE*, Solomon BENJAMIN******

Editorial note:

Professor TANG Wing-Shing had organized EARCAG conferences in Hong Kong twice, in 2001 and 2016. The theme of the 2nd meeting of EARCAG in 2001 was "Alternative Geographies of Asia in the New Millennium", and the theme of the 8th meeting of EARCAG in 2016 was "Radicalism in Theory and Practice". This article brings together three memoirs written by the people who worked closely with Wing-Shing in the preparation and organization of the two meetings. By reflecting on their experiences and memories, this article serves as a collective memoir to show how Wing-Shing organized these conferences in response to the socio-spatial challenges facing the host city and East Asia at the time.

* * *

Memoir 1

The 2nd EARCAG in Hong Kong

MIZUOKA Fujio

After the first conference in Kyongju, Korea, the mission of the newborn EARCAG was to let it take off as the leading platform of critical geography in East Asia. As one of the founders of the EARCAG, Fujio initially contacted a faculty in the University of Hong Kong, yet his response was not positive. Fujio then knocked on the door of Wing-Shing to see if he would be willing to host the second EARCAG Conference.

Wing-Shing expressed earnest willingness to host the EARCAG, with the Head of Department quite sympathetic to the plan and volunteered to be the organizer. The International Critical Geography Group (ICGG) kindly offered financial support to the conference. Thus the Second EARCAG conference materialised as a more official, department-wide event with an international background. The Conference took place on 6-9 December 2001 (inclusive of the pre- and post-conference field trips) at Hong Kong Baptist University.

For the invited keynote speaker, Wing-Shing proposed to invite Richard Peet, the founder of *Antipode*. As Peet was Fujio's Ph.D. supervisor at Clark University, Fujio contacted Peet about coming to Hong Kong. Peet agreed; however, the Geography Department of the HKBU, which was supposed to pay for Peet's travel between the US East Coast and Hong Kong, was perplexed because Peet demanded a much higher airfare with a large detour.

Fujio also delivered one of the keynotes, which dealt with the US military intervention in 'failed states', analysed from the viewpoint of the limits in the spatial expansion of the New International Division of Labour (NIDL). The pre-congress field trip was organised in the Peral River Delta (PRD), including visiting a manufacturing plant engaging in the export-oriented labour-intensive manufacturing. At that time, the PRD prospered by functioning as the core of the NIDL.

With 57 papers presented (including opening speech and invited papers) and 98 registered delegates convened, the Second Conference was a great success, creating firmly the stepping stone for further development of the EARCAG.

After the second Conference, Wing-Shing suggested to Fujio that they jointly edit a book out of the excellent papers presented there into a book. Fujio thus approached a leading publisher of geography in Tokyo, Kokon Shoin, and persuaded the editor to publish the edited book, with financial support of 2 million yen from the Japan Society for the Promotion of Science (JSPS) that Fujio applied for through his university, Hitotsubashi. Wing-Shing and Fujio together wrote the Preface, in which Wing-shing insisted that China at last got rid of its colonial past through Britain's handover of Hong Kong in 1997. Fujio

* Hong Kong Critical Geography Group; Visiting Researcher, Urban Resilience Research Center, Osaka Metropolitan University
** Professor Emeritus, Hitotsubashi University
*** Hong Kong Critical Geography Group
**** Professor, IIT Madras

expressed an alternative view that colonialism persists in China, most notably among the Tibetans and Uyghurs, who are still oppressed under the yoke of the Chinese domination. Wing-Shing seemed to feel uncomfortable with this view, yet he grudgingly accepted it at last. The 240-page book titled *East Asia: A Critical Perspective*, was published in 2010.

Fujio thus cooperated with Wing-Shing to materialise Wing-Shing's various plans and wishes, in bringing the Second Conference into fruition. The EARCAG thus grew to the current prominent position in critical geographers' circle in East Asia.

* * *

Memoir 2

The Breakthrough: A Turning Point of Hong Kong Critical Geographies

WONG Kit Ping (Tammy)

My academic journey with Wing-Shing, as his MPhil student, began with the 2nd EARCAG conference held for the first time at the Hong Kong Baptist University (HKBU) in 2001, organised by Wing-Shing Tang with great help from Fujio Mizuoka. I was a co-presenter with him, and later, helped prepare texts for a conference book publication. This landmark event is a way to highlight Wing-Shing's contribution towards and after that event – his commitment in developing critical geographies within the Hong Kong intellectual arena. Till then, both teaching and research in geography in Hong Kong were long dominated by positivism and quantitative methodologies. Thinking differently, Wing-Shing was the only geography professor who taught us about thoughts and concepts in critical geography – a very difficult but important subject for undergraduates. This included various processes and power relations underlying urban space and development, but also via his mobilisation of Manu Goswami's text on colonial history, introduced us to his critique of Western-centric basis in theorising Asia.

This conference marked a turning point for the local academy. It ushered in critical geographies and research networks: in Hong Kong, but also explored alternative theorisations and critical studies in the wider East Asian context, including China. Over the next few years, Wing-Shing became fully engaged in developing alternative theorisations through an interrogation of Hong Kong's historical geography - not only shaped by global capitalism, but also rooted in British colonialism and its evolving relationship with China. At this and subsequent conferences, Wing-Shing introduced other critical geographers and scholars from overseas and China, encouraging his fellow geographers and students to engage with a wider intellectual community. These encounters fostered further collaborations, exchanges and deep friendships. With Toshio Mizuuchi, for example, he organised several Japan-Hong Kong workshops. From 2001, the regular fieldwork they initiated led to the establishment of the URP sub-centre in Hong Kong. Such collaborations opened up and deepened Wing-Shing's research horizons not only on power relations in urban planning and urban space, but also on social spaces and practices, including the homeless and urban poor, NGOs, housing and social welfare policies.

Soon after the 2nd EARCAG, Wing-Shing formed a study group with students to explore critical theories such as space, power, and social (in)justice issues. This eventually led to the co-founding of the Hong Kong Critical Geography Group (HKCGG). HKCGG is a loose, but self-organised collective intellectual space for Wing-Shing and his students to read and discuss critical theories, conduct fieldwork, community projects, and other social engagements.

We had different kinds of challenges at first: lacking the knowledge and language to communicate between theoretical and practical words, and with local communities and activists (full of uncertainty but excitement!) Second, HKCGG was unprecedented in geography in Hong Kong's universities, which used to "train" students to become part of institutions such as urban planning and education. Third, going back to the mid-2000s, the term "space" remained neither anonymous to the public or community discussion, nor was it used to inform social movements (which were still based on the traditional social work discipline in Hong Kong). I vividly remember that we were often asked by local activists "what is space?". This prompted us to revise our "academic language", hoping that our knowledge could contribute to society.

Although HKCGG was (and is still) in a very marginalised position in geography (particularly in Hong Kong), thanks for Wing-Shing's persistence, HKCGG

gathered different students, and the term "space" turned out to be one of important perspectives in the public discussion and social movements. This linked this student group as a part of a larger intellectual and social network in Hong Kong, meeting people from different disciplines and communities, and involved in activism witnessed in important events such as the demolition of the "Wedding Card Street" (Lee Tung Street), the occupy movement in the Star Ferry/Queen's Pier against demolition that characterised those years of urban struggles.

All of this turned out to be a very specific path of Wing-Shing's academic life: to interrogate critical theories through social practices. By the end of this decade, these ideas were anchored in conferences and workshops to include researchers and later even master students from South Asian interests. This was a togetherness, a path walked jointly to critique prevalent and taken for granted, often imposed concepts, such as "gentrification" and "neoliberalism", not engaged critically enough, and also, via the idea of spatial stories, to engender wider pedagogies to be considered in critical geography elsewhere. Thus, Wing Shing's post-2015 deeper thought to take context and situated history seriously opened a conceptual space far beyond Hong Kong and arguably, East Asia.

* * *

Memoir 3

Euphoric Continuum: A Joyful Moment of Togetherness in the Midst of Political Turbulence

WONG Kit Ping (Tammy),
LEE Chi Lap Jacky, Solomon BENJAMIN
(with HUI Tsz Wa's reminiscence and contribution)

Fifteen years after the 2nd EARCAG, in 2016, Wing-Shing again organised the 8th EARCAG conference in Hong Kong. The political context of Hong Kong, however, has changed drastically. A decade ago, a series of urban conflicts and social movements had emerged to simultaneously erupt throughout the territory. Expanding into varied issues, these prolonged conflicts exhausted civil society. However, as they further escalated leading to a larger scale of social mobilisation confronting violent and virulent responses of the state and government power. Hong Kong was among the prime sites experiencing waves of conflicts and activism in East Asia and across the world.

Wing-Shing organised this conference with political and academic urgency just two years after the "Umbrella Movement" of Hong Kong. He wished to advance analysis of recent social movements and urban conflicts, to develop alternative theories for critical geographies in East Asia, particularly Hong Kong. He hoped to "involve researchers from a broad range of disciplines and of practitioners and activists, and across regions including South Asia, joining hands in the conference" The theme of the 8th EARCAG "Radicalism in Theory and Practice" reflected this moment of crises. The objective, "make sense of the theory and practice of these activism and social movements in East Asia" attracted over 100 participants from different disciplines, perspectives, regions and countries joined in and presented various topics on social activism.

The 8th EARCAG proved to be very fruitful and insightful, and in many ways represented Wing-Shing's lifelong pursuit of dialectics between knowledge and praxis. Inspired by Henri Lefebvre, this relates to theories which inform, shape, and at the same time, are challenged and reshaped by practices. Wing-Shing often informed us how an important keyword "space" is in understanding society and the world differently: these discussions of space now pertain specifically to the historical geography, land and social (in)justices of Hong Kong. The conference can be seen as a critical moment of political encounter: Wing-Shing brought together people from different disciplines to foster new analysis and interpretation of recent urban conflicts and social movements; challenging existing theories, and seeking alternative theories to understanding East Asia.

Fully committed to developing alternative theories in Hong Kong and China he wrote to note to Toshio Mizuuchi:

> "For someone who has been educated in the Anglophone world, immersing in critical geography and urban studies in the West, but nevertheless being highly critical of it, East Asia used to be only a vague geographical concept with little substance".

He strongly argued against the hegemony of knowledge production, or treating East Asia as a vague empirical to the Western theory. He considered such uncritical

ways of applying Western theories as "problematic", as it removed or decontextualised the special trajectories of social, economic, political and cultural in particular places and times. The problem of "random conceptual indigenisation and appropriation", as coined by Wing-Shing, became more severe in the contemporary academic industry. Far from being open, the academics was like a "sausage factory" fight for fundings and positions, and morphed into a more divided, bureaucratic and reactionary formation. At this conference, he refused to accept the view that East Asia was just subject to capital logics, as another form of "variegated capitalism". He warned us that this interpretation promotes a linear perspective of "late-coming countries to be modelled on their more advanced counterparts".

Lastly, he confronted the theoretical insights from different grounded practices rooted in specific historical and geographical processes in order to explore alternative imaginations. Collaborating with local NGOs, activists, former students, and social advocates, Wing-Shing organised five field trips for the 8th EARCAG, to revisit controversial topics including the Umbrella Movement, housing for the urban poor, urban renewal, politics of New Territories' development, and the transformation of former industrial sites. These controversial areas formed the cornerstone of Wing-Shing's academic work and community networks in the last 20 years. As places of direct engagement with community groups and individuals field visits emphasised the point that social justice cannot just be applied from above and derived from concepts elsewhere, but rather, emerge from close understanding of realities and possibilities. These visits demonstrated his collaborative network approach to critical urban geography, where academics, students, and communities collectively contributed to critical thoughts, mutual understanding, and alternative insights. These immersive experiences fostered not just a 'local' but larger across country context. Unbound by nationalistic baggage, such critical dialogues linked the political landscapes of contemporary Hong Kong to sites elsewhere. For instance, Solly Benjamin from Bangalore, Rupali Gupte and Prasad Shetty Mumbai, note that their presentations emphasised the fine grain of context, to the politics and political consequences of everyday territorial practices. All this highlighted Wing-Shing's dedication to interweave much more expansive intellectual, social and community spaces.

Being an urban geographer dedicated to critical theories, Wing-Shing has constructed a living network that connects academic research and local communities, a reflection of his rich and meaningful life. As he wrote, "the world consists of many interconnected parts. Accordingly, activity and social movements in East Asia would have their emergence both rooted in the region and interrelated with other parts of the world." Perhaps, this is his utopian thinking - striving together for alternative imaginations and for a just society. As we reflect, it remains a goal yet to be realised. Despite the great loss, his belief in interconnectedness and his dedication to fostering critical perspectives have sown seeds of inspiration that will continue to bear fruit for generations to come.

Group photo of participants at the 2nd EARCAG Meeting in Hong Kong
December 2001
(Photo Credit: Local Organiser of the 2nd EARCAG Meeting)